

立川談志に愛され、
永六輔に託された

テレビで会えない芸人

2020年
日本民間放送連盟賞
最優秀賞

第58回
ギャラクシー
優秀賞

第47回
放送文化基金賞
優秀賞

第29回
FNSドキュメンタリー大賞
グランプリ

日時 2022年6月21日(火)
19:00~20:30 (18:30開場)

会場 大竹財団会議室
東京都中央区京橋1-1-5セントラルビル11F

参加費 一般=500円
学生、大竹財団会員=無料
定員20名【要予約】

主催 一般財団法人
大竹財団

出演—松元ヒロ

監督:四元良隆 牧祐樹 | プロデューサー:阿武野勝彦
撮影:鈴木哉雄 | 編集:牧祐樹 | 音響効果:久保田吉根 | 音楽:吉俣良
制作:前田俊広 山口修平 金子貴治 野元俊英 崎山雄二 荒田静彦 | クレジットアニメーション:加藤久仁生
製作:鹿児島テレビ放送 | 配給:東風 | 2021年 | 81分 | 日本 | ドキュメンタリー | ©2021 鹿児島テレビ放送

tv-aenai-geinin.jp

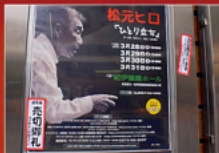
Web予約
PC・モバイル共通
<https://bit.ly/3FOdTuK>



T2
NEXT

テレビで会えない芸人——その生き方と笑いの哲学から、
 いまの世の中を覗いてみる。モノ言えぬ社会の素顔が浮かび上がる。

芸人、松元ヒロ。かつて社会風刺コント集団「ザ・ニュースペーパー」で数々の番組に出演し人気を博した。しかし90年代末、彼はテレビを棄て、主戦場を舞台に移す。政治や社会問題をネタに笑いで一言モノ申す。ライブ会場は連日満席、チケットは入手困難。痛快な風刺に、会場がどっと笑いで包まれる。しかしそれだけではない。松元ヒロの芸には、不思議なやさしさがある——



松元が20年以上語り続ける『憲法くん』は、日本国憲法を人間に見立てた演目。井上ひさしが大絶賛し、永六輔は「ヒロくん、9条を頼む」と言い遺した。その芸は、あの立川談志をしてこう言わしめた。「最近のテレビはサラリーマン芸人ばかり。本当に言いたいことを言わない。松元ヒロは本当の芸人」。けれど、いや、だからこそ、いまテレビで彼の姿を見ることはない…。



そんな今日のメディア状況に強い危機感を募らせていたのは、松元の故郷鹿児島県のローカルテレビ局。2019年の春から松元ヒロの芸とその舞台裏にカメラが張りついた。監督は鹿児島テレビの四元良隆と牧祐樹。プロデュースを手掛けたのは『ヤクザと憲法』『さよならテレビ』などの衝撃作を世に送り出してきた東海テレビの阿武野勝彦。なぜ松元ヒロはテレビから去ったのか？なぜテレビは松元ヒロを手放したのか？そして本作はその答えを見つけられたのか？

tv-aenai-geinin.jp

fb.com/tv.aenai.geinin

@tv_aenai_geinin



永六輔は「芸人氣質」とは「職人氣質」同様、心意気あつての生き方から来る」と言っていました。
 父が松元ヒロさんに「憲法九条をよろしく」と
 言い遺した理由が、劇場版ではよりはっきりと分かります。——永麻理（フリーアナウンサー・エッセイスト）
 この人のやって来たことは言論の自由と言うことだと思ふ。絶えて久しい：言論の自由。——鈴木敏夫（スタジオジブリプロデューサー）
 こんなにも饒舌で話術に長けた人間味豊かなパントマイマーを私は知らない。——立川志の輔（落語家）
 芸人もメディアも、権力の飼い犬でなく、弱者の番犬となれ。
 ヒロさんの生き様と覚悟を、メディアに携わる私たちがこそが学ばねばならない。——望月衣塑子（東京新聞記者）

上映会のご予約・お問い合わせ

一般財団法人 大竹財団

東京都中央区京橋1-1-5 セントラルビル11階
 JR東京駅八重洲中央口から徒歩4分（八重洲地下街24番出口右階段すぐ）、
 東京メトロ京橋駅7出口から徒歩3分、東京メトロ日本橋駅B3出口から徒歩4分
<https://ohdake-foundation.org> 03-3272-3900



スマートフォンのQRコードアプリで読み取ると、現在地から会場までのアクセス方法が検索できます

